

東日本大震災から10年

研究、支援 弘大の成果は

弘前リレーシンポジウム始まる

東日本大震災から10年を共通テーマに、弘前大学の10年間の取り組みを紹介するリレーシンポジウムが26日、同大学主催で弘前市の土手町コミュニティパークで始まった。5月下旬まで、医学、社会科学、工学、農学など各分野で取り組んできた研究活動や被災地の支援活動などを、全7回の日程で紹介する。

（高松拓輝）

開催に先立ち、福田眞作学長は震災直後の支援活動を振り返り「弘大が行ってきた震災の研究、地域住民への支援を知ってもらえれば」と呼びかけた。同日の第

1回では理工学研究科の前田准教授、上原子暲久准教授、農学生命科学部の森洋教授が講演し、オンライン配信も行われた。前田准教授は地震や津

波、地殻変動のメカニズムなどを説明。東日本大震災など災害を契機に地震の観測網が強化されてきたとし「地震や地球内部の理解は飛躍的に進展した」と述べた。地震研究は防災、減災に重点が置かれ、地震・津波のコンピュータシミュレーションの精度が上がったことを紹介した。

上原子暲教授は震災後に被災各地を訪れ橋などを視察、耐震補強が滞っていない構造物の被害や、沿岸部

の津波被害を写真で示し、津波対策などに言及した。森教授は、農業用などの

際に破壊して被害が出ていると説明。県内にも地盤材料が不明な多くのため池があるとの調査結果を示し、早急な整備・廃止を訴えた。次回は2月18日。現地での参加希望者は地域共創科学研究所ホームページで受け付ける。



東日本大震災を振り返りながら、地震のメカニズムや弘前大学のこれまでの取り組みなどを紹介したシンポジウム

※この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。